

教育の現場から

埼玉県新座市立片山小学校教諭 原 真奈美

1. はじめに

前回と今回の調査結果を比較して、「ああ、よかった。英語活動は確実に前へ進んでいる」と、素直に思いました。ここ数年間で英語活動を行う環境が整い、授業の内容や指導者の意欲に大きな変化が生じたといっても過言ではないでしょう。同時に、今後の課題もみえてきた気がします。

2. 学級担任とALTとのチーム・ティーチング

今回の調査では、「貴校では、どなたが外国語（英語）活動を行っていますか」の問いに、97.5%が「学級担任」、93.0%が「外国語指導助手（ALT、AETなど）」（以下、ALT）と答えています（図2-1-4）。

学級担任は、初めて外国語を学習する子どもたちの不安を解消する心強い存在です。子どもたちの実態に応じ、興味や関心を活かした授業をすることも可能です。その意味で、「実際の授業で中心となって指導を行っているのはどなたですか」との問いに、「学級担任」と回答した比率が、06年調査と比べて38.4ポイント上昇し（図2-1-5）、前回調査で回答の多かった「ALT」と逆転したのは喜ばしい限りです。一方、ALTは、「発音について見本を示す」「児童と外国語を使って会話をする」「自然な

外国語の使い方の見本を示す」など、英語活動に不可欠な存在となっています（図2-1-9）。来校回数は学校によりばらつきがあるものの（図2-1-8）、現在の英語活動は、学級担任とALTのチーム・ティーチング（以下、TT）で授業が行われていることがわかります。また少数派ですが、「学級担任、専科教員以外の小学校教員」「中学校や高校の英語教員」「専科教員」など、英語を専門とする指導者とのTTも、行われるようになってきました。

TTは、指導者が授業の進め方や教材の使い方に慣れてきたこと、学級担任とALTとの役割分担がはっきりしてきたこと、ALTの来校頻度が増えたことなどの理由により、円滑に進められるようになった気がします。しかし、打ち合わせの時間が十分にとれない悩みは、いまだに改善されていません（図2-6-2）。ALTや学級担任以外の指導者が中心となっている授業もみられますし、いまだに児童に言葉1つかけず、教室の後ろで見てだけの学級担任がいると聞きます。今回の調査でも、英語活動を行うことに「どちらかといえば反対」「反対」という意見が25.0%を占めています（図2-7-1）。英語活動は4月から始まるのですから、学級担任も前向きにかかわり、形だけのTTにならないようにしなければなりません。

このように、英語活動ではTTが主流になっていることが明らかになりましたが、毎時間

TTで授業が行えるというわけではなく、学級担任1人で授業を行わなければならないことが多いのが実情です。そこで、先生方の心強い味方となっているのが「英語ノート」なのです。

3. 英語活動の救世主「英語ノート」

英語活動でもっとも広く使用されている教材は「英語ノート」で、89.6%という高い数値を示しています（図2-2-1）。さらに、「英語ノート」が「指導計画の作成」や「教材・教具の準備」に役立ち、内容について好印象を持っている人が多いということがわかります（図2-2-3）。また、『「英語ノート」デジタル版』（49.1%）もあり（図2-2-1）、併用すれば学級担任1人でも授業を行うことができます。このように、先生方の救世主となった「英語ノート」ですが、本当に完璧な教材といえるのでしょうか。

「英語ノート」で取り扱われている内容が「児童の発達段階に合っている」という問いに「とてもそう思う」と答えた人は9.4%、「難易度がちょうどよい」という問いに「とてもそう思う」答えた人は、わずか8.9%となっています（図2-2-4）。これは、「文部科学省が作成したので外国語活動の目標と合致しており安心して使えるものの、児童の活動の様子から、実態に合っていないものがある」と先生方が感じていることを示しているのではないのでしょうか。確かに、「英語ノート」には、子どもたちにとって興味深いものもたくさん含まれていますが、なかには発達段階に合っていないものもあると思います。

そこで、私たち学級担任は、内容が児童の発達段階に合っているか、難易度がちょうどよいかを見極め、上手に「英語ノート」を使っていかなければなりません。内容をすべて扱うので

なく、ねらいや実態に即して適切な時期に適切な題材を扱うといった工夫も考えていく必要があります。学級担任は、「英語ノート」を教えるのではなく、「英語ノート」で教えるという気持ちを持って、授業展開を考えていかなければなりません。

「英語ノート」の登場で飛躍的に進歩した英語活動。今後は、この教材をよく研究し、上手に活用することが求められているのです。

4. 十分でない校内研修

では、教材を研究したり、指導力を向上させたりするための「校内研修」の時間は、どのくらいとれているのでしょうか。文部科学省の『小学校外国語活動 研修ガイドブック』には、「中核教員研修を受講した教諭は、各学校において校長・教頭（副校長）の支援のもと、2年間で30時間程度（研究授業等を含む）の校内研修を円滑に運営」と書かれていますが、実態はどうなのでしょうか。

調査結果をみると、校内研修を受けた時間にはかなりのばらつきがみられます（図2-3-1）。これは、各学校の実態が多種多様であることを示しています。国や都道府県、市区町村などの委嘱を受けているような研究指定校、拠点校となった学校では、当然、英語活動に研修の時間を多く費やすことができるでしょう。一方で、他教科や領域の研究をしている学校などにおいては、英語活動ばかりに時間を割くことは難しくなります。教材研究、行事の準備や会議など、現場は本当に忙しいです。2011（平成23）年4月からは、新学習指導要領の実施に伴って授業内容、時数が増えますので、英語活動の研修時間を生み出すことは、ますます難しくなるでしょう。長期休暇などを利用して研修を進めている学校も多くあると思われませんが、それで

も十分な時間はとれません。今回たずねたのは、昨年度（2009年度）から今年度（2010年度）の夏休みの終わりという1年5か月くらいの期間に受けた研修時間であり、2年間での研修時間をきいたものではありませんが、「0時間」「1～5時間未満」と回答した比率は合わせて57.6%、平均でも6.8時間と、文部科学省の提示した「2年間で30時間」という数字には到底及びません。

研修の大切さは、私たち教員も十分承知しており、さまざまな研修を通して指導力の向上に努めているところですが、研究指定校でもない限り、「中核教員を指導者とした校内研修」を十分に実施することは難しいのが現実です。

そこで、校外での研修を充実させていくことは考えられないでしょうか。たとえば、年次研修の際に英語教育を熟知した指導者のもとの指導法を学んだり、免許更新の際に大学で専門的な知識を学んだりして、現在ある制度をうまく利用するのも1つです。中核教員だけでなく、先生方全員が研究校の授業を参観したり、さまざまな英語教育関連団体が主催する研究会やワークショップなどに参加したりできるようにすれば、指導力の向上が期待できます。また、先生たち自身が「言語や文化について体験的に理解し、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を持ち、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむ」ための研修も必要です。国や自治体が長期休業中の短期留学や海外研修などを積極的に推奨し、実りある研修ができる環境を整えられれば、教員の英語力、コミュニケーション力も向上するでしょう。

ただ、これらの校外研修は、地域によって参加しにくい状況のところもあると思われますので、実態に応じて工夫を凝らしていく必要があります。

とにかく、先生たちが、英語活動の意義やよ

さを肌で感じ、自信を持って授業が行えるように研修の内容を充実させていかなければなりません。研修の「時間」は多いに越したことはないのですが、現場の実情を考えると、今後は研修の「質」を上げていくほうがよい気がしています。

5. 子どもの変化

次に、子どもたちの変容をみていきましょう。「外国語（英語）活動を行うことで、貴校の子どもたちにより変化はありましたか」の回答を06年調査と10年調査で比較すると、「とてもあった」が3.5ポイント、「まああった」が12.3ポイント上昇しています（図2-5-2）。これは、先生たちが、今回の結果にあるような「外国語（英語）に慣れ親しんできた」「外国人（ALTなど）に対して物おじしなくなった」子どもたちの姿を見て、率直にそう感じられたのでしょうか（図2-5-3）。

私の勤務する埼玉県新座市では、毎年「英語暗唱大会」というのを行っています。子どもたちが授業で習った表現をもとにスキットを考えて発表するのですが、年々子どもたちの発音がよくなり、自信を持って堂々と演技できるようになっています。

また、どの地域、どの学校に行っても、子どもたちの目がキラキラと輝き、ALTとのやりとりを楽しんでいる様子が見られるので、「英語活動って子どもに魔法をかけるんだな」と感じているところです。

今回の調査でたずねた「英語に慣れ親しむこと」や「英語の発音や語彙」などは、英語に触れる「時間」に比例すると思いますので、今後本格的に英語活動が始まれば、子どもたちのよい変化が期待できるでしょう。しかし、よい変化にばかり目を向けてはいられません。塾や英

会話教室などで英語を習っている子は、「学校の英語活動は簡単すぎる」「ゲームばかりしてつまらない」と感じるようですし、初めて学校で英語に触れた子が「英語がわからない。できる子ばかりが活躍している」といった劣等感を持ってしまうケースもあるようです。1年生から英語活動を行っている学校では、高学年になるとゲームや歌ばかりではあきてしまいます。授業の「質」を変えていかなければ、子どもたちが英語嫌いになる可能性は大いにあります。現在の英語活動は、学校によって多種多様なので、児童の実態に応じて手立てを工夫していく必要があるでしょう。

6. おわりに

今回の調査で、行政の支援体制や環境がかなり整備され、英語活動は軌道にのってきたことがわかりました。ALTなどとのTTに慣れ、学級担任が「英語活動はうまくいっている」と感じられるようになったことも大きな進歩です(図2-6-3)。

しかし同時に、約70%の学級担任が「外国語(英語)活動は専門に指導する教員(専科教員)

が教えるのがよい」という考えを持っていることもわかりました(図2-7-2)。先生方は、一生懸命取り組んでいるものの、自分の知識や経験の不足から、指導への自信が持てないのではないのでしょうか。実は、私も「英語活動の指導が得意です」とはいえず、悩みは山積です。

けれど、私は、担任だからこそできることがあると信じています。ALTと一生懸命コミュニケーションを図ろうとする担任の姿を見て、うまく話せなくてもジェスチャーや表情で伝えることはできるのだということを子どもたちは悟るはずです。そして、大事なのは言葉ではなく、相手を思いやり理解しようとする心なのだと感じるはずです。

携帯電話やメールなどの普及により簡単にコミュニケーションができるようになった現代社会において、相手との直接的な対話を苦手とする人が増えています。私は、英語活動を通して、子どもたちに「人と向かい合ってコミュニケーションする楽しさ」を教えたいと思っています。

これからが本番です。英語活動で培った力が、未来を生きる子どもたちの宝物となることを信じ、微力ですががんばっていきたいと思います。